Ⅱ－２　歯科疾患調査結果の概要

結果の概要（Ⅱ－2　歯科疾患実態調査）

1．被調査者数

被調査者数は、279 名であった。性別では女性のほうが多く（男性 119 名，女性 160 名）、年齢階級別では、60 歳代と 70 歳代が多かった（統計表 O-1）。

前回（平成 22 年）は、前々回（平成 17 年）よりも 100 名以上減少したが、今回はさらに 40 名減少した（表 1，統計表 O-2）。

表1　調査年次による被調査者数の比較（年齢階級別）

	調査年次ごとの被調査者数（人）		
	平成 17	平成 22	平成 28
総　数	432	319	279
1～ 9	55	10	27
10～19	36	10	10
20～29	20	10	7
30～39	48	15	26
40～49	45	30	27
50～59	68	56	31
60～69	76	70	58
70～79	67	87	65
80～	17	31	28

被調査者の平均年齢は、総数で 54.5 歳であり、前回（平成 22 年）より 5 歳若くなった（表 2）。

表 2　調査年次による被調査者の平均年齢の比較・対象別

対　　象	調査年次ごとの被調査者の平均年齢（歳）		
	平成 17（2005）年	平成 22（2010）年	平成 28（2016）年
総数	46.1	59.5	54.5
乳歯（1～14 歳）	6.9	7.3	6.7
乳歯＋永久歯（5～14 歳）	9.1	9.3	8.3
永久歯（5 歳～）	48.9	60.2	56.5

2．う蝕

1）乳歯（1～14歳）

（1）有病状況

1～14 歳における乳歯のう蝕有病者率は、総数（1～14 歳）の 31.4％であった（統計表 I）。

(2) 処置状況

1～14 歳における乳歯の未処置歯保有率は、総数(1～14 歳)の 28.6%で、このうち「未処置歯のみ」が 22.9%、「処置歯と未処置歯の併有」が 5.7%であった(統計表 I)。

2) 乳歯＋永久歯(5～14歳)

(1) 有病状況

5～14 歳における乳歯と永久歯を合わせたう蝕有病率は、総数(5～14 歳)の 44%であった(統計表Ⅱ)。

(2) 処置状況

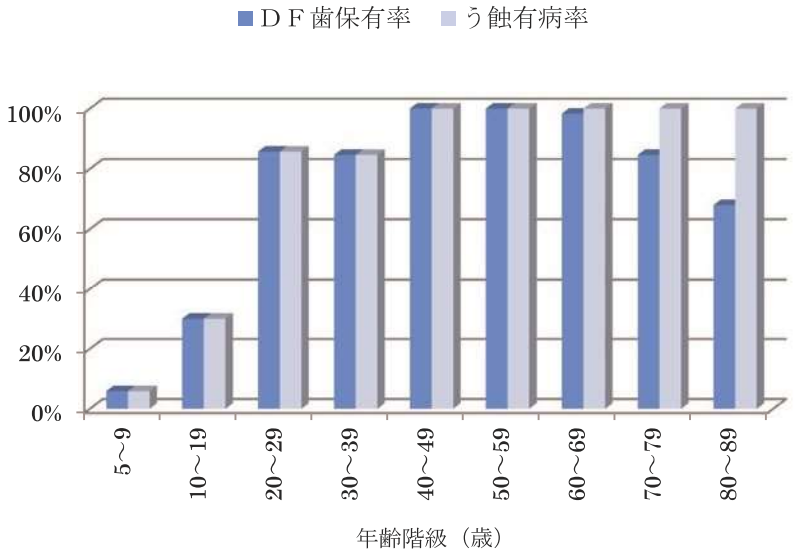
5～14 歳における乳歯と永久歯を合わせた未処置歯保有率は、総数(1～14 歳)の 40%で、このうち「未処置歯のみ」が 32%、「処置歯と未処置の併有」が 8%であった(統計表Ⅱ)。

3) 永久歯(5歳以上)

(1) 有病状況

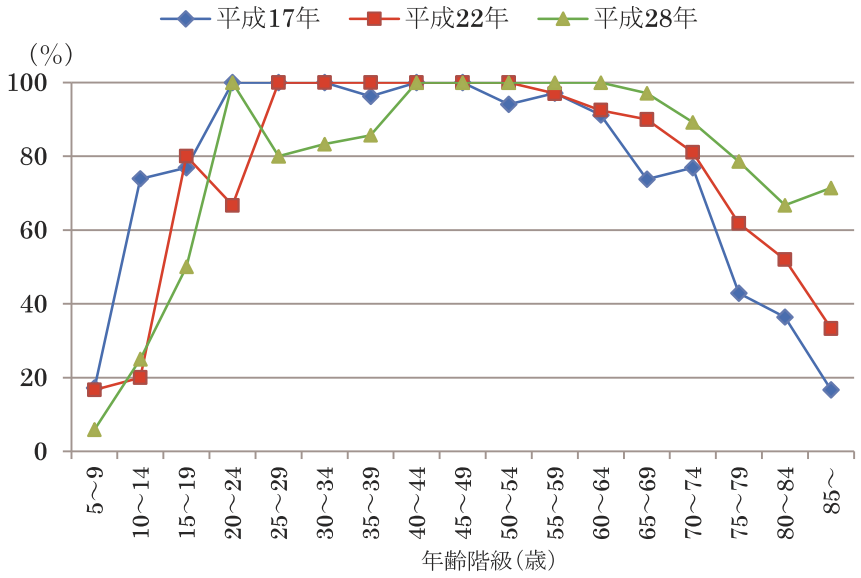
5 歳以上における永久歯のう蝕有病率は、総数(5 歳以上)の 89.6%で、年齢階級別にみると 5～9 歳で 5.9%、10 歳代で 30%、20 歳代で 85.7%、30 歳代で 84.6%であり、40 歳代以上の各年齢階級では 100%であった(図 1, 統計表Ⅲ-1-1)。 一方、「DF 歯保有者の割合」(注:D は未処置の永久歯、F は処置済の永久歯を表す。)は、無歯顎者が除外されるため、無歯顎者の割合が高くなる高齢層では年齢の増加とともに値が減少した(図1, 統計表Ⅲ-1-1・Ⅲ-1-2)。

図 1 永久歯:う蝕有病率と DF 歯保有率(年齢階級別)



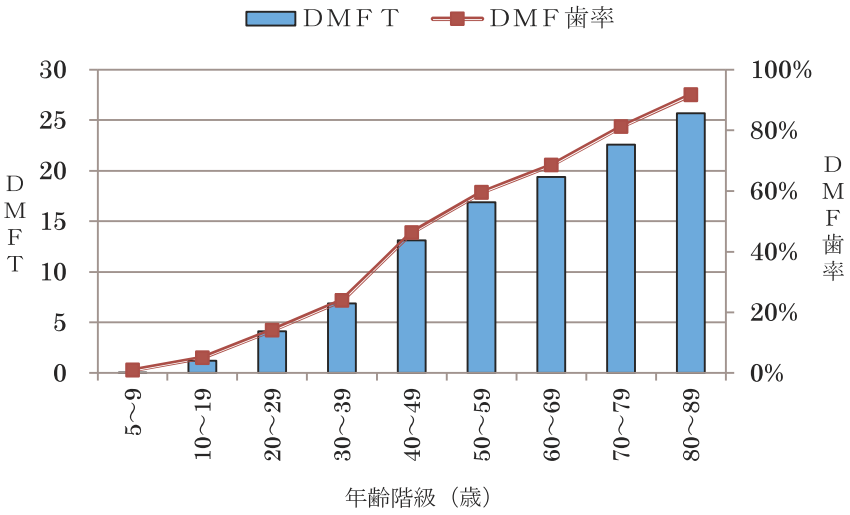
また、「DF 歯保有率」を年齢階級ごとに前々回及び前回調査(平成 17 年・平成 22 年)と比較すると、5～40 歳では調査ごとに減少傾向にあるが、60 歳以上では増加傾向にある(図 2, 統計表Ⅲ-1-3)。

図 2　永久歯:DF 歯保有率の推移(年齢階級別)(平成 17 年・22 年・28 年)



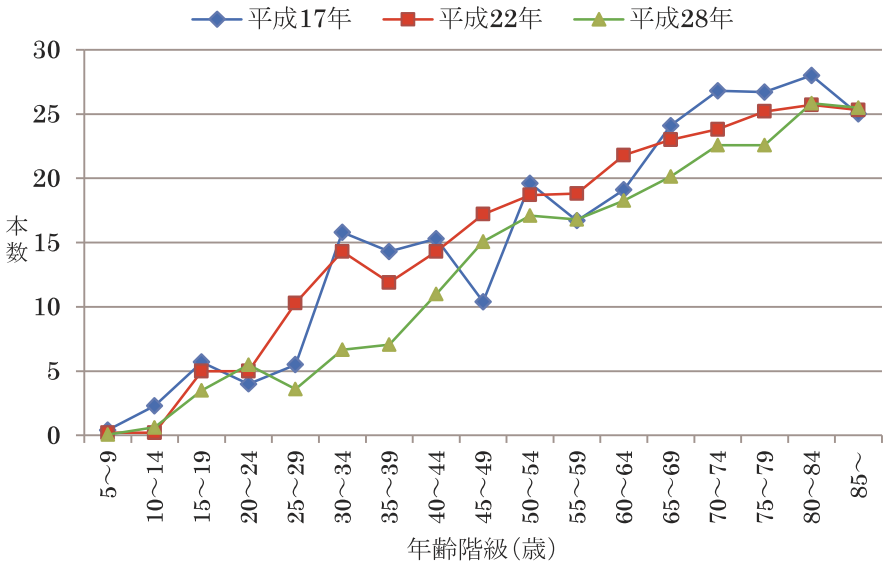
DMFT(DMF 歯数)(注:M はう蝕のために喪失した永久歯を表す。)と DMF 歯率は、加齢とともに増加した(図 3, 統計表Ⅲ-2-1)。

図 3　永久歯:DMFT および DMF 歯率(年齢階級別)



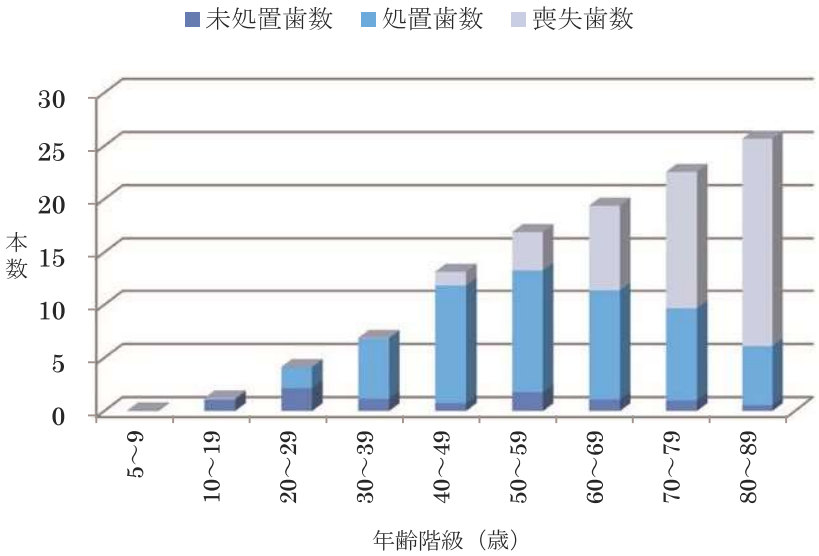
また、DMFT を年齢階級ごとに前々回及び前回調査(平成 17 年・平成 22 年)と比較すると、ほぼ全階級で減少した(図 4, 統計表Ⅲ-2-3)。

図 4　永久歯:DMFT の推移(年齢階級別)(平成 17 年・22 年・28 年)



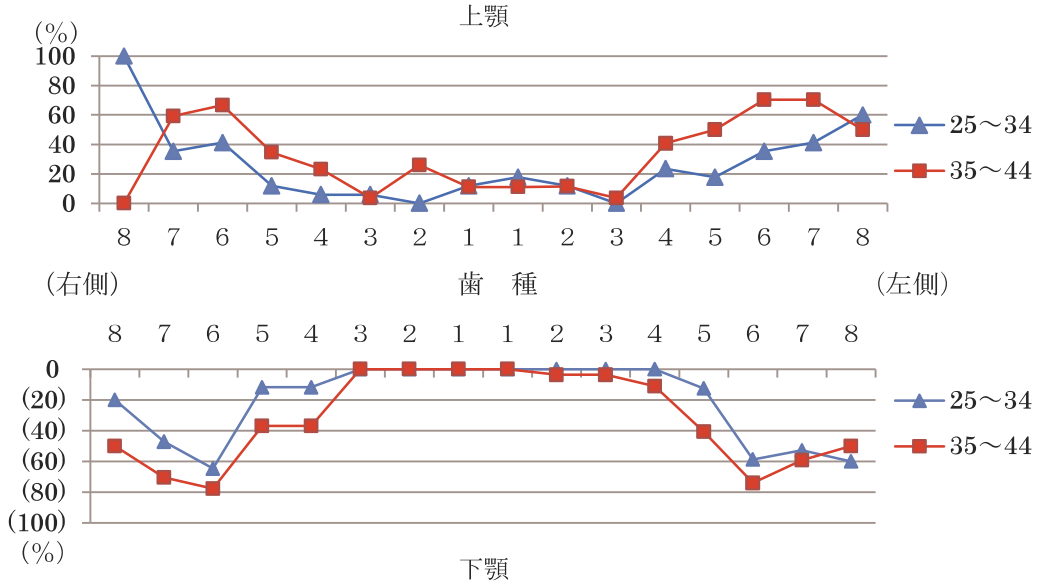
DMFT の内訳を年齢階級別にみると、40 歳以上で喪失歯数が加齢とともに増加し、処置歯数は 60 歳まで増加したが、それ以降減少に転じた(図 5, 統計表Ⅲ-2-1)。

図 5　永久歯:DMFT の内訳(年齢階級別)



高齢階級では歯周疾患による喪失が影響することから、25～44 歳に絞って DMF 歯率の歯種(部位)による違いを年齢階級別にみると、上下顎ともほぼ大臼歯部、小臼歯部、前歯部の順に高く、下顎前歯部は低かった。35～44 歳では DMF 歯率が増加した。(図 5, 統計表Ⅲ-3)。

図 5　永久歯:DMF 歯率(歯種別、25～44 歳)

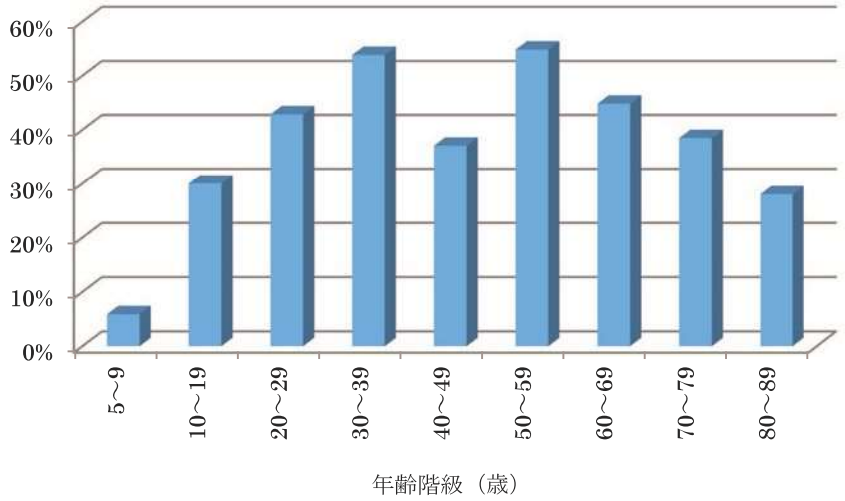


(2) 処置状況

未処置歯保有率は、総数(5 歳以上)の 39.4%で、このうち「未処置歯のみ」が 3.7%、「処置歯と未処置歯の併有」が 35.7%であった(統計表Ⅲ-1-2)。

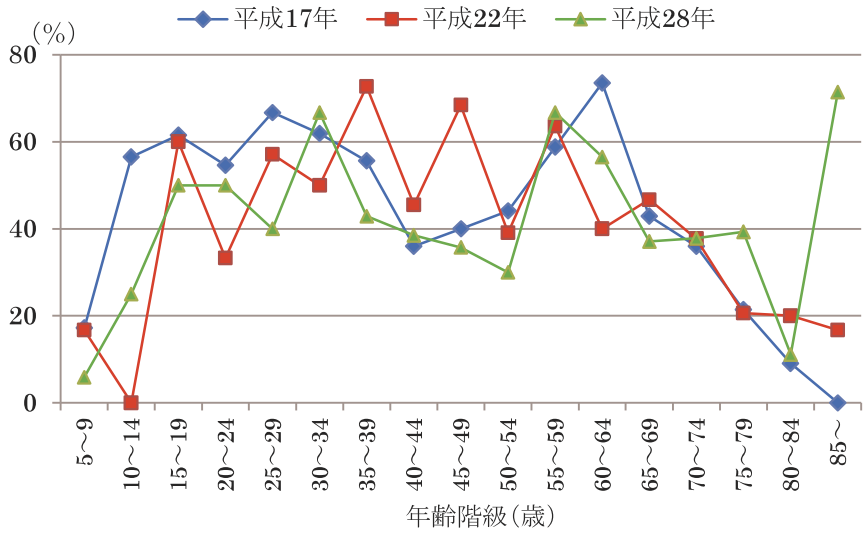
未処置歯保有率は、40 歳まで増加し、60 歳代以降減少した。(図 6, 統計表Ⅲ-1-2)。

図 6　永久歯:未処置歯保有率(年齢階級別)



また、未処置歯保有者率を年齢階級ごとに前々回及び前回調査(平成 17 年・平成 22 年)と比較すると、年齢階級ごとに激しく増減する状況は変わりなかった(図 7, 統計表Ⅲ-1-3)。

図 7　永久歯:未処置歯保有者率の推移(年齢階級別)(平成 17 年･22 年･28 年)



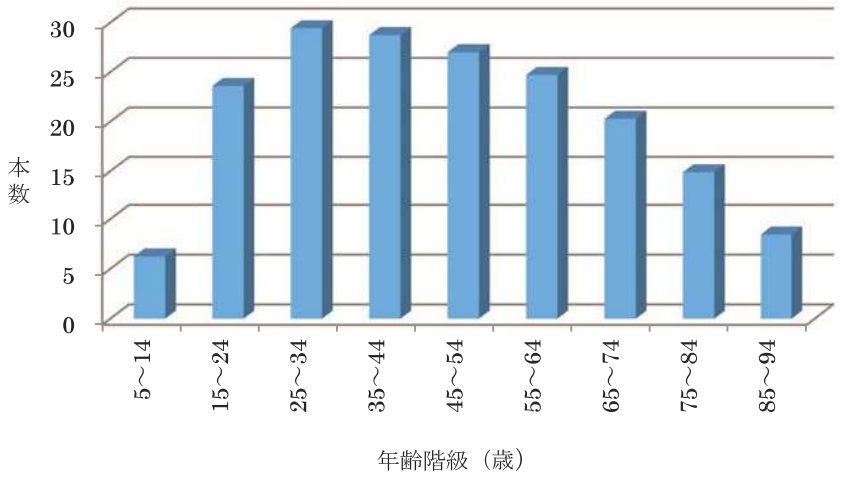
現在歯のう蝕処置状況の内訳を年齢階級別にみると、健全歯数は 30 歳代以降減少した。処置歯の内容は 50 歳代以降充填歯数が減少し、クラウン歯数が 80 歳代まで増加した。未処置歯数は 30 歳代以降徐々に減少した(以上、いずれも図 6, 統計表Ⅲ-2-2)。

図 6　永久歯:現在歯のう蝕処置状況の内訳(年齢階級別)

3. 歯の喪失（5歳以上）

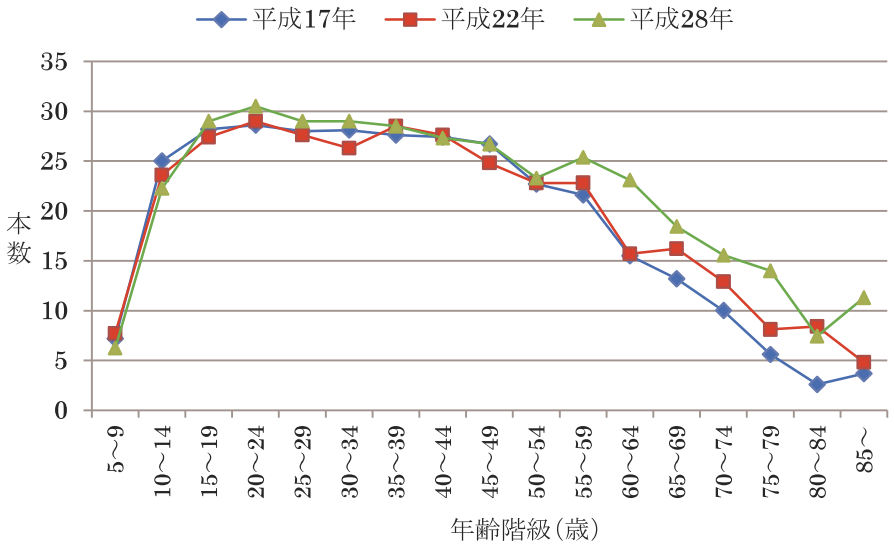
一人平均現在歯数は、35 歳以上では、加齢につれて減少した（図 8，統計表Ⅲ-4-1）。

図 8　1人平均現在歯数（年齢階級別）



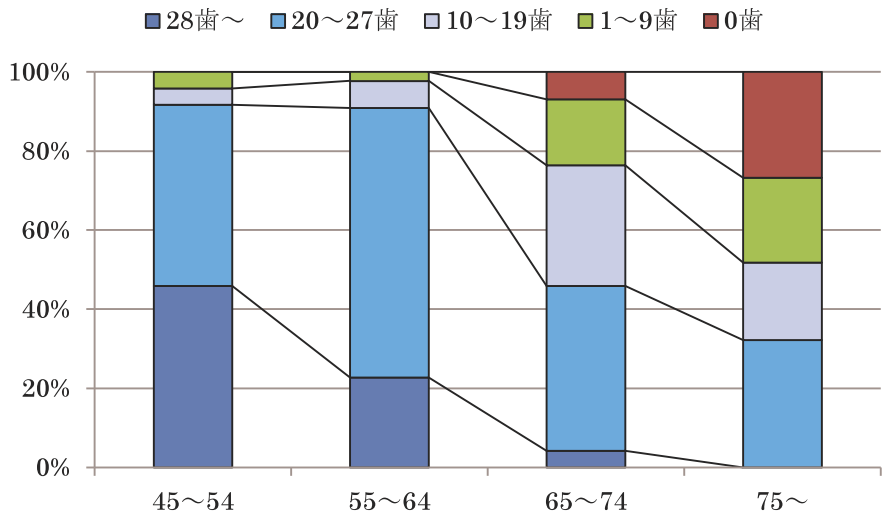
また、1人平均現在歯数を年齢階級ごとに前々回及び前回調査（平成 17 年・平成 22 年）と比較すると、55 歳以上では調査ごとに増加傾向にあった（図 9，統計表Ⅲ-4-5）。

図 9　1人平均現在歯数の推移（年齢階級別）（平成 17 年・22 年・28 年）



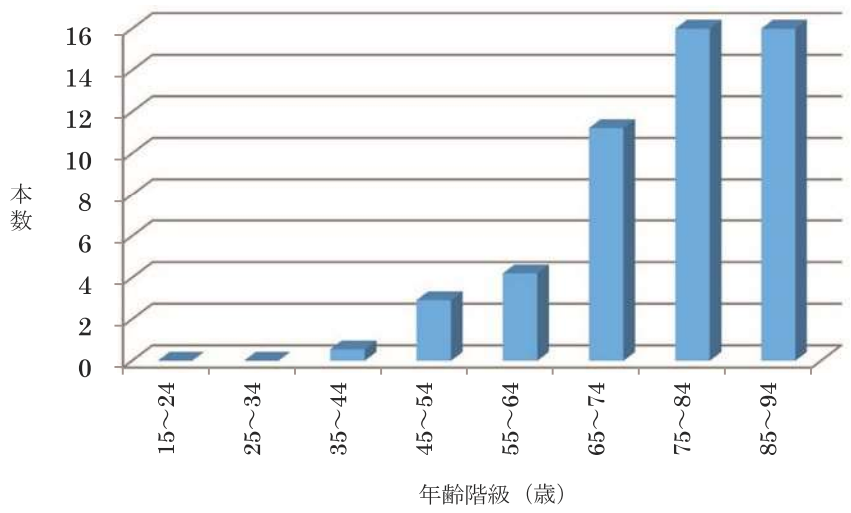
現在歯数を5群(0歯/1-9歯/20-27歯/28歯以上)に分け、45歳以上の年齢階級別の占有率をみると、28歯以上群は加齢につれて減少し、20～27歯群は64歳までは増加するが以後減少し、10～19歯群は74歳まで増加するが以後減少し、1～9歯群では64歳までわずかに減少するが以後増加した。また、0歯群は65歳以上で出現し、以後増加した(図10, 統計表Ⅲ-4-3)。

図10　現在歯数の群別の占有率(45歳以上、年齢階級別)



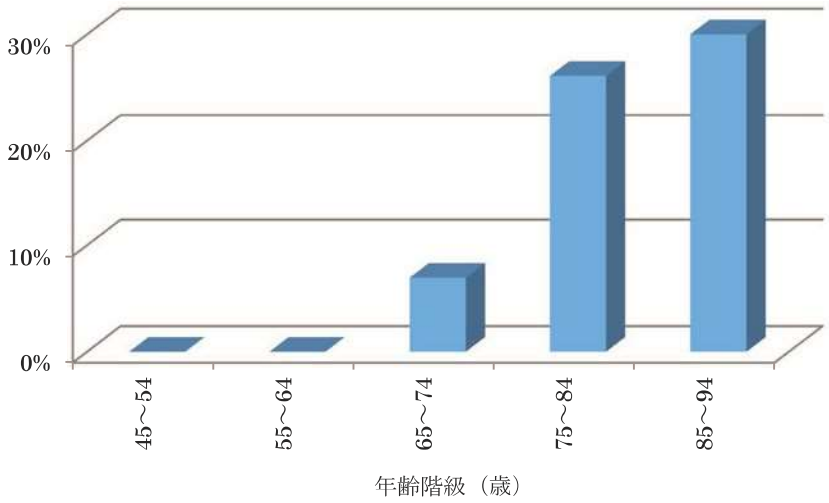
1人平均喪失歯数は、ほぼ加齢につれて増加した(図11, 統計表Ⅲ-4-2)。

図11　1人平均喪失歯数(15歳以上、年齢階級別)



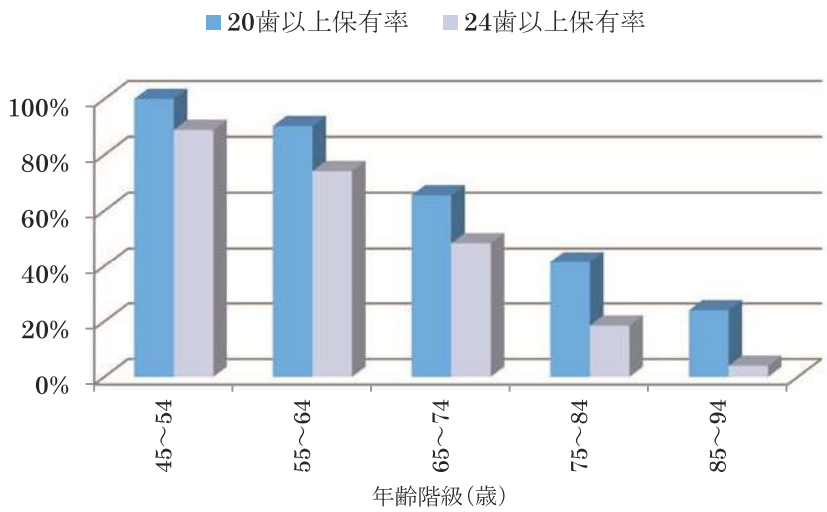
無歯顎率(現在歯を有しない者の割合)は、65 歳から加齢につれて増加した(図 12, 統計表Ⅲ-4-1)。

図 12　無歯顎率(45 歳以上、年齢階級別)



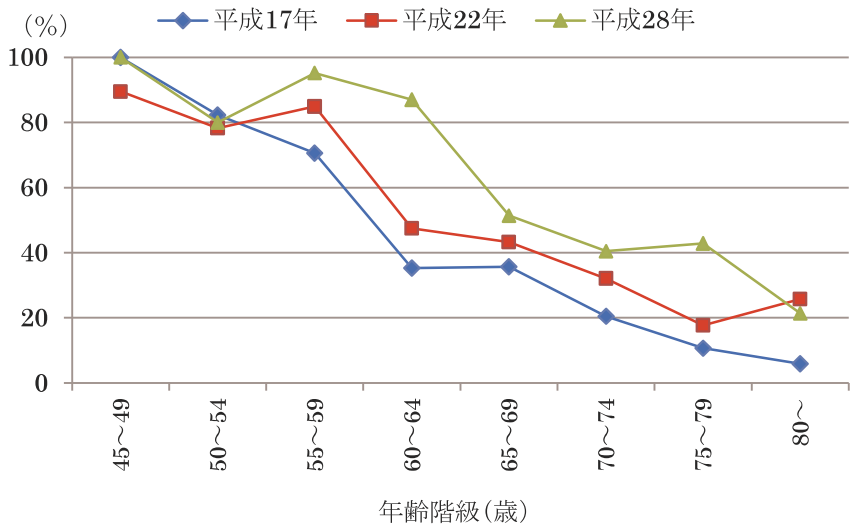
20 歯以上保有率(20 歯以上の現在歯を有する者の割合)と24 歯以上保有率(24 歯以上の現在歯を有する者の割合)を、45 歳以上の年齢階級別でみると、両者ともに加齢につれて減少し、75～84 歳ではそれぞれ、41.5%と 18.5%であった(図 13, 統計表Ⅲ-4-1)。

図 13　20 歯及び 24 歯以上保有率(45 歳以上、年齢階級別)



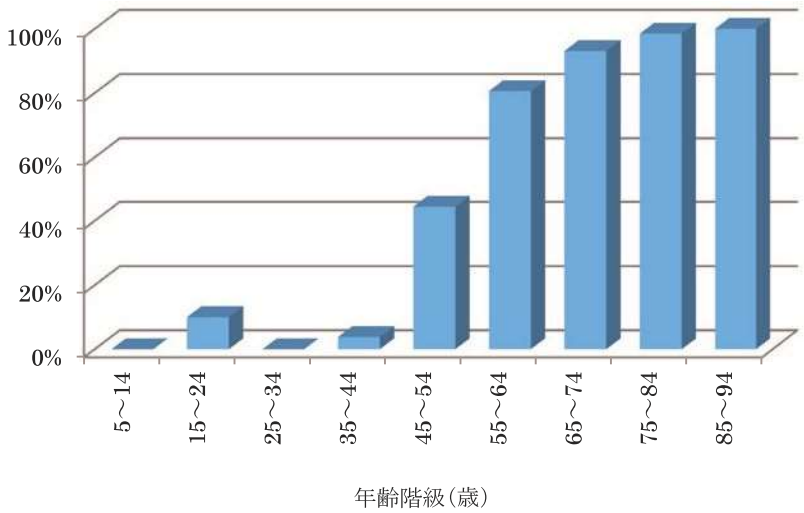
また、20 歯以上保有者率を 45 歳以上の年齢階級ごとに前々回及び前回調査（平成 17 年・平成 22 年）と比較すると、55 歳以上ではほぼ調査ごとに増加した（図 14，統計表Ⅲ−4−4）。

図 14　20 歯以上保有率の推移（45 歳以上、年齢階級別）（平成 17 年・22 年・28 年）



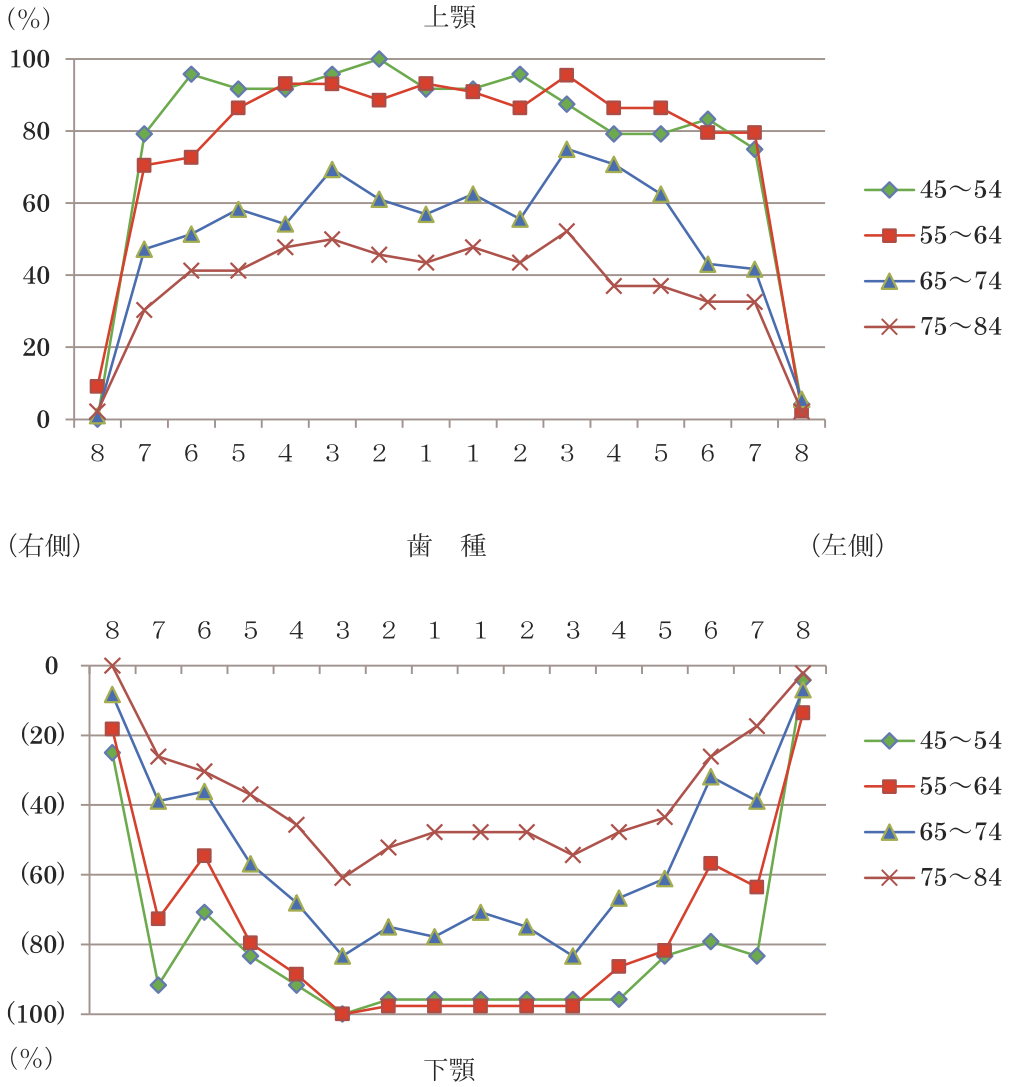
喪失歯保有率（喪失歯を有している者の割合）は、45 歳を超えてから急激に増加し、65 歳以上では 90%以上が喪失歯を有していた（図 15，統計表Ⅲ−4−1）。

図 15　喪失歯保有者率（年齢階級別）



歯種別に現在歯保有率（現在歯を有する者の割合）を年齢階級別にみたところ、全ての階級において前歯部に比べて臼歯部の値が低い傾向にあり、その傾向は下顎において顕著であった。また、65 歳以上では両顎とも全歯種で加齢につれて保有率が低下した（図 16，統計表Ⅲ-5）。

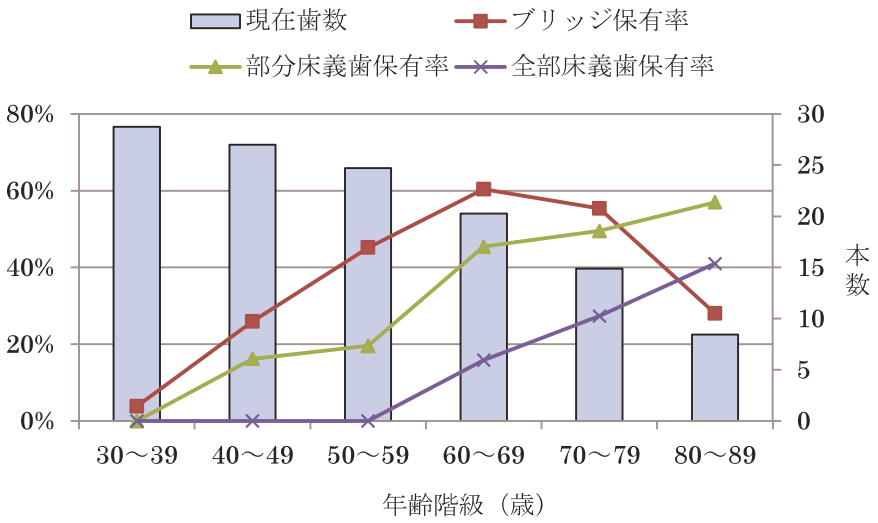
図 16　現在歯保有率（歯種別，45 歳以上）



4. 補綴の状況

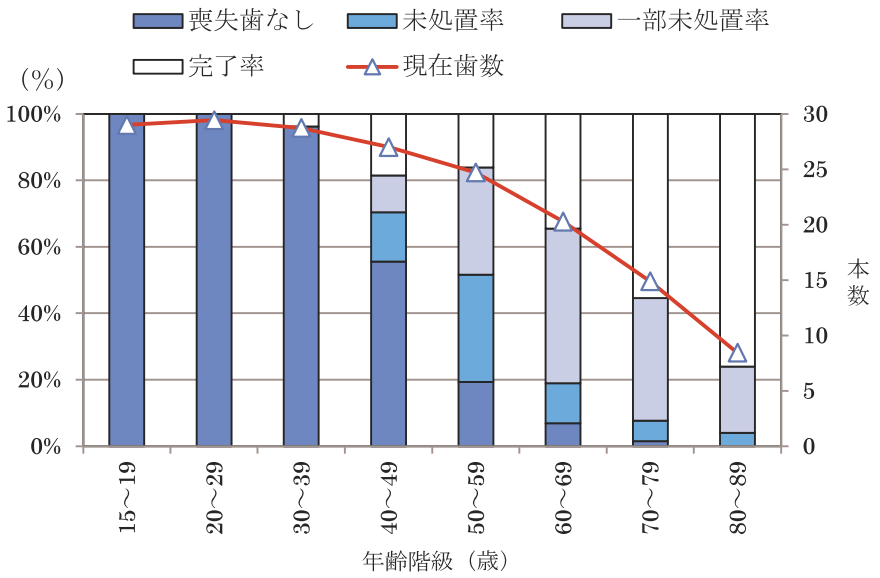
30 歳以上について各種補綴物(ブリッジ＝架工義歯、部分床義歯、全部床義歯)保有者(使用者)の割合をみると、ブリッジ保有者は加齢につれて増加するが、70 歳代以降減少した。部分床義歯保有者は 40 歳から出現し、一方全部床義歯は 60 歳代から出現し、共に加齢につれて増加した。(図 17, 統計表Ⅲ-4-2, 統計表Ⅳ-1)。

図 17　各補綴物保有率と1人平均現在歯数(30 歳以上、年齢階級別)



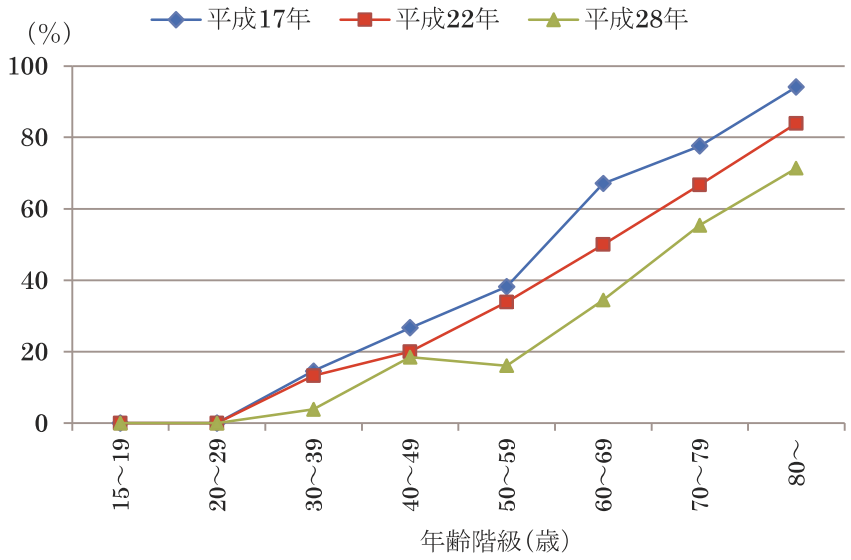
補綴処置の状況をみると、加齢とともに現在歯数が減少し、補綴完了者の割合が増加した(図 18, 統計表Ⅲ-4-2, 統計表Ⅳ-2-1)。

図 18　補綴状況と1人平均現在歯数(15 歳以上、年齢階級別)



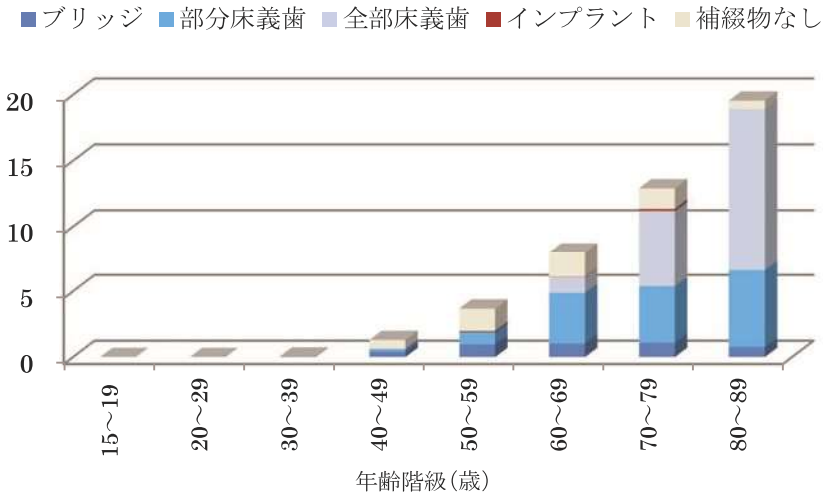
また、補綴完了者の割合を年齢階級ごとに前々回及び前回調査（平成 17 年・平成 22 年）と比較すると、調査ごとに減少した（図 19，統計表Ⅳ-2-2）。

図 19　補綴完了者の割合の推移（15 歳以上、年齢階級別）（平成 17 年・22 年・28 年）



喪失歯の補綴状況について、補綴物の種類別の平均補綴歯数をみると、部分床義歯と全部床義歯は加齢につれて増加し、ブリッジについては年齢階級による違いはわずかであった。（図 20，統計表Ⅳ-3）。

図 20　補綴物の種類別の平均補綴歯数（15 歳以上、年齢階級別）

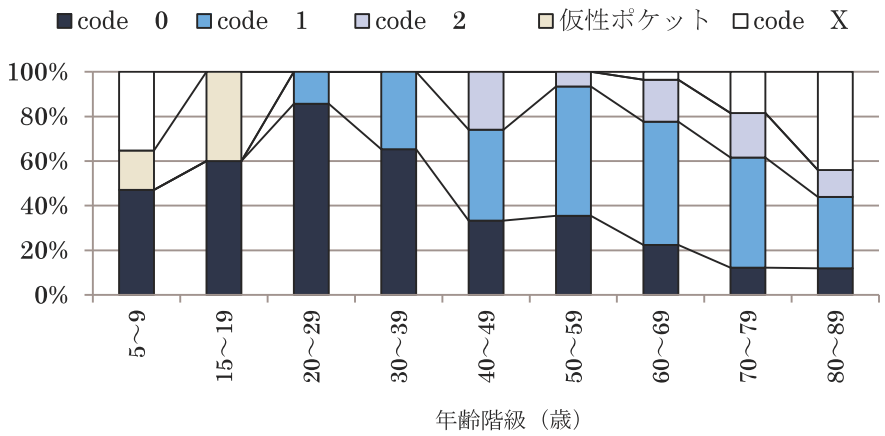


5. 歯周疾患

(1)歯周ポケット(個人最大コード)

「健全(code 0:4mm未満)」は、20歳代では8割以上を占めるが、30歳代以降加齢とともに減少した。「浅いポケット(code 1:4mm以上 6mm未満)」の割合は20歳代から出現し、30歳代以降増加するが、70歳代以降「対象歯なし」の増加により減少した。「深いポケット(code 2:6mm以上)」は40 歳代から出現し、60 歳代以降に増加し、80 歳代以降は「対象歯なし」の急増により減少した。「仮性ポケット」は、5〜9歳から出現し、15〜19歳で増加したが、20歳代以降に消滅した。「対象歯なし(code X)」は、60歳代で出現し70歳代以降に急増した。(図21, 統計表Ⅴ-1)。

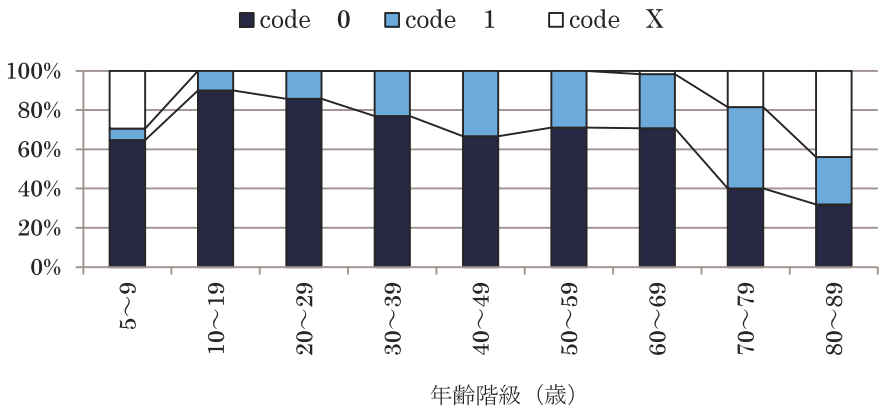
図21 歯周ポケットの個人最大コードの分布(5歳以上、年齢階級別)



(2)歯肉出血(個人最大コード)

「出血なし(code 0)」の割合は 10 歳代まで増加し、20 歳代以降少しずつ減少し、「対象歯なし(code X)」の増加により、70歳代以降急減した。「出血あり(code 1)」の割合は加齢につれて40歳代まで増加したが、50歳代、60歳代は横ばいとなり、70歳代以降は「対象歯なし」を含めると急増した。(図22、統計表Ⅴ-2)。

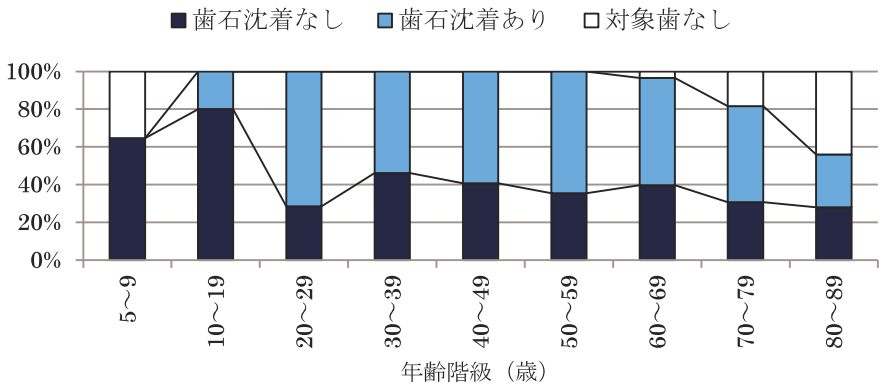
図22 歯肉出血の個人最大コードの分布(コードXを含む、5歳以上、年齢階級別)



(3)歯石沈着

「歯石沈着あり」(対象歯1歯以上に歯石沈着が認められる)の割合は10歳代で最も低かった。他の年代ではあまり差がなかったが、60 歳代以降は対象歯の増加に伴って減少した。(図 23、統計表Ⅴ-3)。

図 23 歯石沈着の状況(5 歳以上、年齢階級別)



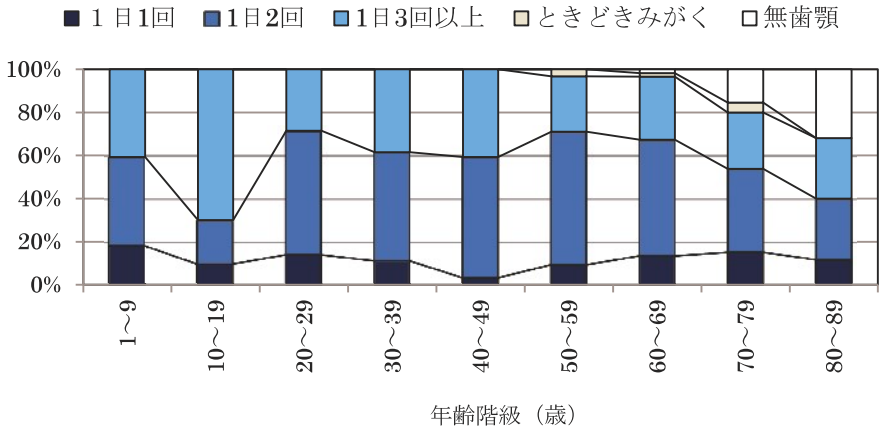
6. フッ化物の塗布状況(14歳以下)

フッ化物歯面塗布を受けた経験がある小児の割合は全体の 51.4%であり、前回(平成 22 年)より減少した(統計表Ⅵ-2)。フッ化物塗布を受けた場所の内訳をみると、市町村保健センター等が 22.8%、その他の医療機関が 28.6%であった(統計表Ⅵ-1)。

7. 歯みがきの状況(1歳以上)

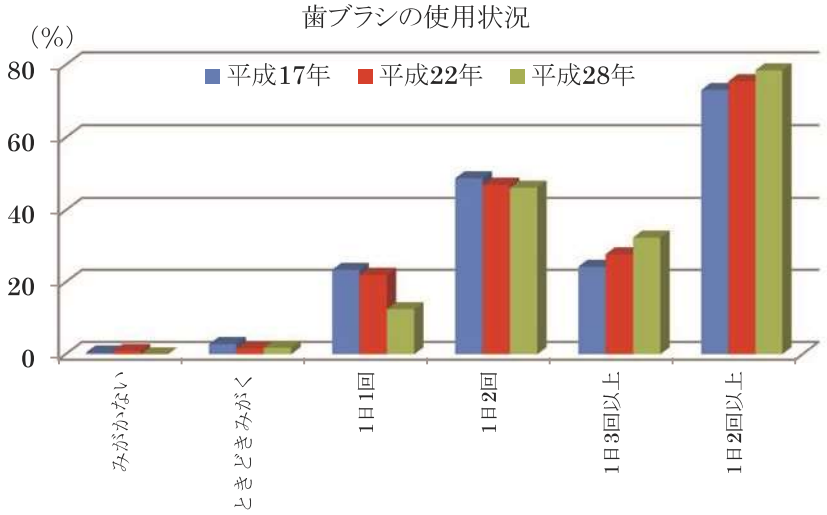
毎日歯をみがいている者の割合は91%で、回数別に内訳をみると、1回が 12.5%、2回が 46.2%、3回以上が 32.3%であった(統計表Ⅶ-1)。年齢階級別にみると、10 歳代で3回以上の割合が最も高く、一方、50 歳代、60 歳代、70 歳代でときどきみがく者が存在した(図 24, 統計表Ⅶ-1)。

図 24 歯みがきの状況(年齢階級別)



また、歯みがきの状況の推移を前回調査及び前回調査（平成 17 年・22 年）と比較すると、1 日 3 回以上みがく者の割合が調査ごとに増加した（図 25，統計表Ⅶ-2）。

図 25　歯みがきの状況の推移（平成 17 年・22 年・28 年）

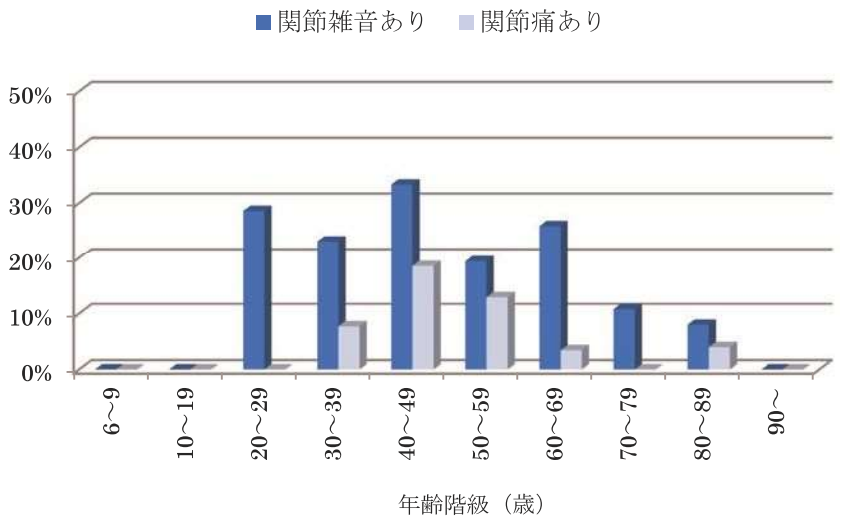


8．顎関節の異常（6歳以上）

「口を大きく開け閉めした時、あごの音がしますか」という問に「はい」と回答した者の割合は 17.7%であった。この割合を年齢階級別にみると、40 歳代が最も高く、次いで 20 歳代と 60 歳代が高かった。I（図 26，統計表Ⅷ）。

「口を大きく開け閉めした時、あごの痛みがありますか。」という問いに「はい」と回答した者の割合は、5.3%と関節雑音よりも低かった。この割合を年齢階級別にみると、これも 40 歳代が最も高く、次いで 50 歳代が高かった。（図 26，統計表Ⅷ）。

図 26　顎関節の異常：関節雑音及び関節痛を自覚している人の割合（年齢階級別）



なお、本結果に示した主な数値等（○○率，○○平均○○歯数、と記されているもの）は、以下の方法により算出した。

1．無歯顎率

$$無歯顎率（\%）＝\frac{無歯顎（永久歯の現在歯数が1歯もない）者の数}{被調査者数（5歳以上）}$$

2．喪失歯保有率

$$喪失歯保有率（\%）＝\frac{喪失歯を有する者の数}{被調査者数（5歳以上）}$$

3．20歯以上保有率

$$20歯以上保有率（\%）＝\frac{永久歯の現在歯数が20歯以上の者の数}{被調査者数（5歳以上）}$$

4．24歯以上保有率

$$24歯以上保有率（\%）＝\frac{永久歯の現在歯数が24歯以上の者の数}{被調査者数（5歳以上）}$$

5．1人平均喪失歯数

$$1人平均喪失歯数（歯）＝\frac{永久歯の喪失歯の総数}{被調査者数（5歳以上）}$$

6．1人平均現在歯数

$$1人平均現在歯数（歯）＝\frac{永久歯の健全歯・未処置歯・処置歯の総数}{被調査者数（5歳以上）}$$

7．う蝕有病率

1）乳歯

$$う蝕有病率（\%）＝\frac{乳歯に未処置歯・処置歯のいずれかを有する者の数}{被調査者数（1〜14歳）}$$

2）乳歯＋永久歯

$$う蝕有病率（\%）＝\frac{未処置歯・処置歯・喪失歯（永久歯のみ）のいずれかを有する者の数}{被調査者数（5〜14歳）}$$

3）永久歯

$$う蝕有病率（\%）＝\frac{永久歯に未処置歯・処置歯・喪失歯のいずれかを有する者の数}{被調査者数（5歳以上）}$$

8．1人平均う蝕経験歯数（dft, DMFT）

1）乳歯（dft,df歯数）

$$dft＝\frac{乳歯の未処置歯・処置歯の総数}{被調査者（1〜14歳）}$$

2）永久歯（DMFT,DMF歯数）

$$DMFT＝\frac{永久歯の未処置歯・処置歯・喪失歯の総数}{被調査者数（5歳以上）}$$

9．df歯率, DMF歯率

1）乳歯

$$df歯率（\%）＝\frac{乳歯の未処置歯・処置歯の総数}{乳歯の現在歯数の総数}$$

2）永久歯

$$DMF歯率（\%）＝\frac{永久歯の未処置歯・処置歯・喪失歯の総数}{永久歯の現在歯数の総数}$$

10．未処置歯保有率

1）乳歯

$$未処置歯保有率（\%）＝\frac{乳歯の未処置歯を有する者の数}{被調査者数（1〜14歳）}$$

2）乳歯＋永久歯

$$未処置歯保有率（\%）＝\frac{乳歯および永久歯の未処置歯を有する者の数}{被調査者数（5〜14歳）}$$

3）永久歯

$$未処置歯保有率（\%）＝\frac{永久歯の未処置歯を有する者の数}{被調査者数（5歳以上）}$$